

2022年7月31日 礼拝メッセージ

「太陽と傲りの中で」

岡嶋千宙伝道師

聖書 コヘレトの言葉 1章2, 12-14節、2章18-23節

3週間前の日曜日、向島で礼拝を守ったあと、電車で帰宅しました。途中、大和西大寺駅で乗り換えるのですが、奈良行きが電車が発車するまで少し時間があつたので、駅ナカショッピングモールをぶらぶらしていました。何気なく歩いていて、ふと、ある光景が目にとまりました。エレベーター横のスペースに設けられた小さな花屋さんの前に、行列ができていました。店舗前の共有通路にも人があふれ、それだけでは収まらず、隣のテナントにまで食い込みそうなほど。誘導のために、警備員も出ていて、何かかと思っていたら、花屋の店員さんの声が響きました。「献花をご購入の方はこちらにお並びください!」3週間前の日曜日、7月10日、参議院選挙の投票日。大和西大寺駅。そして、供え物の献花。ということで、もうお分かりかと思えます。その2日前の7月8日の金曜日、自民党所属の候補者を応援するために奈良を訪れていた安倍晋三元首相が、暗殺されました。安倍氏への献花を買うための人だかりができていたのです。それまでは一部の地域の人や、歴史通の人にしか知られていなかった奈良の地名が、一気に全国で有名になりました。献花のための行列も、それを生じさせるきっかけになった事件も、普段は見かけることがない光景。銃の統制が他国に比べて格段と厳しい日本で、銃殺事件が起こった。しかも日中。多くの人が見守る中で。普段は穏やかで、通勤通学の人たちや、買い物をする人たちが賑わう、安全・安心な場所で起こった不穏な出来事。予期しないこと、普段とは異なること、当然と思っているのとは真逆のことが起こる。大きな衝撃を受けます。当惑します。価値観を揺さぶられます。それまで築いてきた世界観にヒビが入ります。「これまでの価値観で良いのだろうか」「当然と思っていたこの世界は当然ではないのではないか。」本日与えられている御言葉が記された「コヘレトの言葉」。旧約39冊、新約27冊、全66冊ある聖書の中で、かなり異質です。教会において「当然」あるいは「常識」とみなされる事柄、教え、信仰のあり方、生き方を、揺さぶるような、かなり強烈なインパクトのあることが語られています。揺さぶられることを覚悟に、しばし、その言葉を味わってみましょう。

1章2節「コヘレトは言う」。この書物の語り手は「コヘレト」という名で呼ばれる人です。その人物は、自分のことを「エルサレムでイスラエルの王である」と明らかにしています(1:12)。国家で最も権威ある人。最大の重鎮である王さま。1章13節と14節には、その王が、言葉を紡ぐようになった経緯、背景が記されています。「天の下で起こるあらゆることを知恵によって探求しようと心を尽くした」(1:13)。「太陽の下で行われるあらゆる業を見た」(2:14)。その結果、コヘレ

トが悟ったこと。1章2節「空の空。一切は空」。聖書協会共同訳では「空」と訳されていますが、英語では、たとえば、meaningless, useless, pointless などといった言葉が充てられています。無意味、空虚、無益。太陽の下、天の下、この世で行われるすべてのものはむなしい、と。なぜ、むなしいのか。王は語ります。人が自分の持つ最大の労力をもって何かを成し得たとしても、その得たものがその人のもとにとどまり続けることはないではないか。すべては、その時だけのもの。その時が良かったとしても、すぐに、過ぎ去ってしまうではないか。本日の箇所とは別のところで、コヘレトは、人々が生きている間に欲するであろうものごと、例えば、財産、名誉、地位、快樂など、そのすべてが無益であると語ります。なぜなら、すべての人に死が訪れるから(2:16)。どんな地位にあらうとも、どんなに多くの財を蓄えたとしても、人は結局のところ死ぬ。だから、動物と変わるところはない。人間が動物に勝るところは全くない(3:19)。さらに、死を横に置いたとしても、生きている「人の心には悪が満ちていて」(9:3)、正しい人が正しい行いの果実を得られる訳ではない。逆に、悪しき人が悪い行いの報いを受けることはなく、むしろ悪い人が、善い行いをなす人の果実を得ているではないか(3:16, 4:1, 7:15, 8:14)。

これがコヘレト王の主張です。どう感じたでしょう。この言葉が語られた当時、その時に、聞いていたユダヤの人々にとって、これは、ものすごく驚くべきことでした。いや、驚くというより、あり得ない。ユダヤの伝統によれば、人は神様の似姿を持つ存在です(創 1:27)。神様によって息を吹き入れられたのであって(創 2:7)、他の地上の生き物とは決定的に異なる性質を持っています。それなのに、コヘレトは、「人間は動物と同じ。人間も死ぬのだから、他の生き物と変わるところは一切ない」と主張するのです。あり得ない!! また、ユダヤの人々が生きる上で大切にしていることがあります。民族に共通する処世術として大事にされていること。それは、神を畏れること。神を畏れるというのは、神が求める善を行うこと。善を行えば、祝福があり、幸せに生きることができ。逆に悪を行えば、長生きできず、幸せに預かることができ。悪人も善人も、その生き方に応じて、相応の報いが神の裁きとして下される。ユダヤの人々は、そんな価値観、世界観を有していました。これに対して、コヘレトは、善を行っても無意味だと語るのです。善を行った者が悪を行った者に与えられるべき報いを受け、その逆に悪を行った者が善を行った者に与えられるはずの利益を得ている。それが現実ではないか、と言うのです。7章15節「善人がその善のゆえに滅び、悪人がその悪のゆえに長らえる」。ユダヤの人々からしてみれば、やはり、あり得ない。受け入れがたい。なぜ、コヘレトはこれほどまでに執拗に、ユダヤの伝統や価値観とは異なる言葉を紡いだのでしょうか。その言葉の背後には、どんな思いがあるのでしょうか。そして、その言葉が聖書の一部として残されているということから、わたしたちは、神のどんなメッセージを聴くのでしょうか。それを探るためのひとつのヒントが、「コヘレト」と名乗る人の人物像から探り出せます。

先ほど見た通り、この書物を書いた人は自分のことを「イスラエルの王」として紹介しています。この言葉から、また書物全体から、この人の性別を想像してみてください。「コヘレト」という言葉は、もとをたどると「集める」という意味の言葉です。それが名詞として形を変えたのが「コヘレト」なのですが、ひとつ、奇妙なことがあります。ヘブライ語の名詞には性別があって、「コヘレト」はどうかと言うと、女性形です。「イスラエルの王」であれば、他の聖書箇所の記事からしても、女性の王は存在しないので、当然に男性のはずです。なのに、この人物は、女性の名前を持っているのです。もうひとつ、関連して気になること。「コヘレトの言葉」の中で、コヘレトがなにかを言ったりしたりするとき、多くの場合は男性が行う動作として記されています。ヘブライ語では、名詞だけではなく、動作を表す言葉にも性別がつくのですが、コヘレトと結び付くのは、一般的には男性形の動詞です。ですが、一ヶ所だけ、コヘレトの発言に対して、「女性が語る」という形で言われているところがあるのです。日本語ではわかりづらいのですが、7章27節「コヘレトは言う」。この「言う」が女性形になっているのです。断定はできません。ですが、コヘレトという人物は、社会通念として想定されている性別のあり方とは異なる生き方をしている人物だと言うことができるのではないのでしょうか。以前、この教会で「エステル記」を取り上げたことがありましたが、そこで登場した、宦官のような存在であったのかもしれませんが。社会の多数とは異なる生き方をする存在。そして、異なるがゆえに、太陽の下で生きることを許されない存在。日中、陽の光が当たる場所にいることができず、公共の場で大勢の人の前に姿を現すことのできない存在。影、闇の存在。その影の人であるコヘレトが、太陽の下に出てきて、人々の前に姿を現し、語る。いくら影の存在とはいえ、社会で生きるためには、太陽の下にいる人たちとの交流が必要だったのかもしれませんが。時に、自ら出向いて、その太陽の下に行かざるを得ないこともあったことでしょう。その度に、自分の姿を隠さなければならぬ。自分の素性を他人に知られないように、自分のほころびがでないように、大勢の人が「異常」と考える自分の特質が漏れでてしまわないように、衣を着る。「太陽の下にある人」と同じ衣を着て、太陽の下にある人を演じる。自分とは異なる別の人。「太陽の人」になって、自分の姿を封じ込める。ですが、限界があります。溜め込んだ思いは、解放される出口を求めてエネルギーを蓄えます。そしていつしか爆発します。膨張したエネルギーが、言葉となって現されたのが、コヘレトの言葉として聖書に残されている書物である、と考えられないのでしょうか。注目すべきは、コヘレトが「太陽の人」としての衣装をまとうときに、モデルとしているのが「イスラエルの王」だということです。それは、表向きには、自分の素性を隠すための最も手っ取り早い覆いとなるからでしょう。ですが、そこには、大きな皮肉、あるいは鋭い批判の刃が隠されているように思えます。一般的な王であれば感じ得ない事柄を、王の言葉として、王の知恵が導いた結論として語る。社会の常識、民族の伝統、人々の知恵、それらが明らかにし得ない命の現実があることを世に示す。太

陽の下にさらけ出す。常識や当然の背後に、忘れられた世界があること。太陽の下で繰り返され維持される伝統の背後で、陽の光を浴びることのできない存在があること。誰の目にも留まらず、出生も死も覚えられることなくこの世を去っていく存在があること。人々の知恵によって築かれる繁栄に預かることができずに、日々の生活すらままならない人たちがいること。たとえ「太陽の人たち」から「異常・異質」とみなされ、忘れられていたとしても、そこに生きる人々の存在があること。コヘレトは、自らが影に生き、忘れられている存在として、あえて、「イスラエルの王」の衣装を纏い、天の下に出て、太陽の下で、陽をあびて暮らす大勢の人々を前にして、語ります。社会に根付く当然や常識の脆さを露わにするために。コヘレトは、その上で、一人一人の命にとって「良いこと」は何か、自分の思いを言葉にします。飲み食いし(2:4, 2:25, 3:12, 5:17, 8:15)、喜び楽しんで一生を送ること(3:12)。パンを食べ、気持ちよく酒を飲み、適切な衣装を身に付け、愛する者と共に生きる(9:7-9)。ここには、影に生きる者だからこそ感じる喜びの思いが溢れ出ています。社会通念とか、伝統とか、常識とか、当然とか、当たり前とか、普通とか。そういったものではなくて、それぞれが、各々にとっての日常を、あるがままに、ありのままの姿で生きること。それこそが、人の命なのだ。

今日は、主日の礼拝であまり扱われることのない書物、「コヘレトの言葉」を取り上げました。これまでに礼拝メッセージで聞いたことがある、という方も、本日のメッセージからは、コヘレトに対して普段抱いているイメージとは異なる印象を受けたのではないのでしょうか。それこそ、本日のお話が、「当然と思っていることとは正反対のもの」だったかもしれません。わたしが今、語ったことが、「正解」、「唯一の正しい解釈」と主張するつもりは毛頭ありません。ただ、教会にとって、しかもこの時代にあって、「世の常識、社会の当然を揺さぶる」ということが、強く求められている、と感じるのです。わたしたちが主と仰ぐイエスは、人生を通して、死と復活を通して、示してくれたではありませんか。当時の常識を根本から覆す姿に、何度も触れているではありませんか。そのイエスを信じる者は、だから、常識や当然を一旦カッコに入れることを求められていると思うのです。当然の背後にあるもの、見えなくされているもの、無きものにされていることに、心と魂と目を、そして自分自身の存在を向けていく。わたし自身、普段は「当然」や「常識」という衣装をまとっています。その衣装がもたらす様々な利益を得ています。コヘレトの言葉を借りれば、それもまた「空なること」。だからこそ。その衣を脱ぐ場所と時間が必要なのでしょう。「わたし」という姿で。今、与えられているこのときを、精一杯に味わい尽くすこと。そのための場所と時間。共にあり、共に生きる空間。それが教会なのだと思うのです。日曜の朝、この場所で、このときに、それぞれの仕方で集ったみなさんと、礼拝の時を守り、わたしたちに命をくれた神様に思いを馳せること。共に生き、生かされていることの喜びを味わえたこと、感謝です。神様に、みなさんに、そしてこれから出会うお一人おひとりに、「ありがとう」。